

第46回全国同和教育研究大会徳島大会特別報告に寄せて

全同教徳島大会開会行事での特別報告を終えて、心地よい感動に浸ることができた。私が特別報告をするように決定したのは1年程前だった。徳島の先人が築いた礎を私はどう受けとめ、どのようにわが同和教育の営みを報告していくか、私に課せられた課題は大きかった。それゆえに、この1年余りの間にたくさんのことを学ばせていただいた。人間は厳しい状況に立つことによって、より大きくなれると自分を励まし続けた一日一日であった。

私に与えられた40分余り、私の頭の中には父の顔が浮かんだ。母の顔が浮かんだ。祖父の顔が浮かんだ。そして、10年前に亡くなった祖母の顔が浮かんだ。1万を遙かに越える人たちが聞いているという緊張感は壇上に立ったとき吹っ飛んでいく。私の声が私の中で反芻され、自分のあり方が自分の中で整理されていく。多くの人々の熱い視線が本当にありがたかった。

部落解放、差別からの解放を願い歩いている人たちが全国各地においでる。初めて出会った人たちが大半であるのに、一人一人の顔が私とずっとつながった仲間であるように思えてくる。そして、私に熱い視線をくれる参観の方々の息づかいが伝わってくる。

今、祖父はこの時間をどのように過ごしているのだろうかと思った。母は今、どのような思いでこの時の流れを感じているのだろうかと思った。父は今、どのような思いで働いているのだろうかと思った。祖父や祖母、父や母の生命をもらって生きていることが本当にありがたい。

大会の数日前、私は祖父のことについて次のような思いを綴っている。

※ ※ ※

あれは小学校3年生ぐらいだったと思う。野球のグラブを買ってもらうために、当時祖父がやっていたプロイラーの飼育、その出荷についていった帰り徳島の街を歩いた。そして、祖父と丸新デパートの今でいうファミリーレストラン（大食堂）で食事をしたことを覚えている。ごちそうの並んだウインドー、私は当時「オムライス」が最高のごちそうだった。他にも値段の高いメニューに目はいったが、それでいいと言った。祖父はもう一つ何か食べようかと言ってくれた。私は迷った。私は安いものをさがした。それが「みつ豆」だった。祖父も私とまったく同じものを食べた。「オムライス」と「みつ豆」、本当にささやかな贅沢だった。

グラブを買ってくれた遠慮からだったのか。祖父に対する遠慮からだったのか。そのことは覚えていないが、高いものを食べたら悪いという気持ちがあった。

私は今日、そのことを夕食の場で思い出し、不覚にも妻と子どもの前で涙をこぼした。その涙の底にあるものは何だろうか。祖父への哀れみか。あれほどひたむきに生きても幸せ薄い社会への怒りか。祖父の生命をしっかりとついで生きていきたい。

私は小学校4年の4月より小学校6年の終わりまで、まる3年間祖父に鍛えられていく。朝6時に起床、身の周りを片づけ、当時6時17分から放送されていたNHKの「テレビ体操」に合わせて祖父と共に体操をする。6時30分より玄関から庭の掃き掃除、6時45分より30分間、祖父と共に仏壇の前に座りお経をあげる。そして、朝食……。

そんな毎朝のことが、今の私のものの見方や人間の生き方についてのとらえ方の基盤になっている。当時はたぶん苦痛であっただろうが、それはしなければならないことという認識があったと思う。大学時代、友人と酒を飲んだら、そんな少年時代のことがなつかしく思い出され、よくそのときのことを友人に語ったものだった。私の中にあった祖父への感謝の気持ちが、その当時

のことをなつかしく語らせていったのだろうと思う。

小学校4年になる4月、私は祖父にこんこんと言われたことをはっきりと覚えている。それは決して人から後ろ指を指される人間であってはならないということだった。身の周りのことでも金銭のことでも、キチツとした人間でなければならないということだった。そのとき、祖父から金銭出納帳を渡され、その日から小遣いの使い道をしっかりと書かされていく。

とにかく、小学校4年の4月から何事についても厳しく、いろいろなことを教えられてきた。それは祖父が私にしてくれた精一杯の同和教育であったと思う。

そんな祖父が全同教大会の1カ月ほど前から幾度となく「全同教大会、頑張れよ」と言ってくれた。その言葉が本当にありがたい。祖父の無念を、先人の無念を、私はしっかりとかついで生きる。この怒りをわがエネルギーとして堂々と特別報告の舞台に立とう。絶対卑屈にならない。堂々と生きる。自分の生きざまを堂々とさらして生きる。誇りうる生き方を求めて……。

(1994年11月19日19時)

※ ※ ※

特別報告の40分余り、張りつめた緊張感の中で流れていく時間。会場にいた妻の涙が見える。板中の仲間の涙が見える。部落の仲間の涙が見える。差別というものが本当に憎い。

私の娘、丸ごと愛し続ける愛子と佐紀が、私の生命を受けたがために差別を受けるといふ。私の子どもであるために部落差別にさらされるという。この不合理に怒りがこみ上げる。私の闘う姿を通して、娘たちに人間としての生き方をじっくりと考えさせていきたい。

多くの人が拍手してくれたこと。多くの人が励ましてくれたこと。まさに感謝の中に生きた1994年11月26日であり、全同教徳島大会特別報告であった。

この1年、自分の部落問題をしっかりと整理し、日々たくましくなっていく妻の姿が、私に大きな勇気を与えてくれた。妻の一言一言が私の目を覚ましていった。妻は私に自分のすべてをぶつけてくれる同志である。

全同教大会や小学校の教師という自分の立場に寄せて綴った文章を全同教大会の10日ほど前に見せられた。そこには妻の苦悩やその生きざま、願いが綴られていた。それは妻が勤務する小学校でのPTAの参観授業後の部落問題学習に寄せる小集団学習についてまとめた文章である。

※ ※ ※

先日のPTA小集団学習での部落問題学習は、一人一人が部落問題を自分の問題としてとらえ、具体的な体験を交えての話し合いができたと思う。ことに結婚差別について近所や親戚であった事例が出され、それについての思いが語り合えた。講師の方のご自分の娘さんの結婚に際して、ご主人と話し合い、聞き合わせをしないということが同和教育に取り組んできたご自分の結果というお話に続いて、ご自分の結婚に際して、相手の男性だけを見て、聞き合わせもなく祝福してくれたご両親のように、お子さんの時もそうしようと今からご主人と決意されていると言われた保護者の方の話など心打たれた。

しかし、席の順に話をする形式で、最初のうちは差別の厳しさを痛感させられる発言や、やや傍観者的な発言があり苦しかった。その学習の場には、A地区の人ではないが、対象地区出身の人が、私の同級生だけでも二人おられた。その立場を思うと顔が真っ赤になってきた。先生方の「教師」の立場からとしての発言の域を脱していない発言が一番こたえた。これが地区の子どもが顔をあげられない授業かと思った。次に何かしなければと、非常にあせったが、そうこうしているうちに、その同級生の一人が出て行ってしまった。ショックだった。私は自分の順番がきて、

自分の結婚差別について語ったが、教職員の会では、最近はずいぶん話ができるが、自分の住んでいる地域の人々を前にして、やはり声が震える。父やこの小学校の校区出身で私以上に知り合いの多い母の立場をつい考える。「何が大変でしたか」と聞かれ、「周りの人に分かってもらうこと、親戚の人に分かってもらうこと。」と答えたが嘘である。両親と涙を流して言い争ったこと。結婚して子どもができるまで、長い間、母親とは目を合わせて話ができなかったこと。いまだに部落問題について母親と話をする、深い溝を感じ、ついにはののしり合いになり、最近はお互いにその話は避けていること。

昨年、夫が「峠」という作品を文部省の道徳資料として書いた。自分の結婚の体験をもとにしてである。夫は、何度もその都度、私に「書いてもいいか。この文章はこのままでいいか。」と聞いた。両親を氣遣ってである。私はいつもかまわないと答えたが、出版される頃には、父も（教職を）退職しているだろうという計算もあった。「峠」と事実との違いは、最後の結末である。あんなに美しい結末ではない。

先月、ついに出版された。そして、全国同和教育研究会の特別報告でも「峠」に触れる。両親に読んでもらうかどうか二人で悩んだ。子どもの誕生パーティーにかこつけて来てもらい読んでもらった。重い重い空気が流れる。両親はアスティとくしまに聞きに行きたいと言ってくれたが、いまだに私の方で「峠」についての話は避けている。しかし、父とは段々と突っ込んだ話ができるようになってきた。

父が結婚前、「お前と町中で二人暮らしをもしよんだったら、もっと正面切って応援するんやけどな」とポツツと言ったことがある。「父さん、それが差別とちがうん」と言うことが、そのときの父の苦しみを前にして言えなかった。

父は、「間違っているのは、差別する方なんだから、信念を持つこと。」と自分に言い聞かせるように話してくれる。数年前、徳島で四国同和教育研究会があったとき、私が参加していないというと、「何のために結婚したんな」とひどく叱られたこともあった。近所や親戚の人々とのつきあいの中で、私以上に厳しい差別の矢面に立たされている父であり母である。

100%自分をさらけ出して語るということはなかなかできないことである。私が一方的に心配していた一人、残っていた方の友人は、立場を明らかにすることはなかったが、自分の思いを話してくれた。私の話の途中、こちらを振り向き微笑んでくれた。

この中で、A地区に住んでいる人、語ろうが語るまいが、差別の中に自分をさらけ出して生きている人々の強さを再び思い知らされた。

教師も一人の人間として、できることならその生い立ちの中での部落問題を語る必要があると思う。教職員間で、根本的な同和教育観についての話し合いが、本音で語り合えない以上、授業研究や研修形態等について話し合いをしても、お互いがずれていると感じるだけの繰り返してはないだろうか。

私自身の反省として、対象地区の子どもや人々と積極的にかかわってこうとする姿勢が欠けている。行事に参加しても形ばかりである。腰が引けている。これは何なのだろうか。それだけ部落問題に対する強い姿勢がないのだろうか。根強い差別者としての意識が根底にあるのだろうか。たぶんそうであろうと思う。自分の課題として自分につきつきたい。

※ ※ ※

全同教会前日、板野中学校が実施した全体学習を妻は参観に来る。その全体学習に彼女はかなり大きな衝撃を受けたようであった。自らを語る生徒の姿に自分を重ね授業の感想を次のよう

に綴っている。

※

※

※

部落問題解決に向け行動することによって自分のうみを出し、うみを出しつつ行動する。今日の学習を通して今の私が決意したことです。

「部落でも関係ないで。」私が主人と結婚することを、とても仲がよかった友人に言ったときに言われ、私はショックを受けました。そのときは今よりももっと弱かった私はいろんなことをその人に聞いてもらいたかった。「その人もりっぱな人なんだろ。大学も出てご両親もしっかりした人たちなんやろ。」その時私は何も言えませんでした。イライラしつつもムシャクシャしつつも言葉にすることができませんでした。

長いことその友に対して私はそのことをこだわり続けていましたが、今考えてみると逆の立場だったら私はどうだったろうと思います。

主人と結婚してからもドロドロの差別の中で半ば私は投げていたように思います。今も私は母と部落問題について話し合うと必ずののしり合いとなり、最近は私のほうでこの問題をさけています。

このあきらめの感情の中に今日の子どもの発言の中にあつた母親と同じ意識、「私は出身ではない。子どもも半分は違う。」という意識が全くなかったとは言いきれない……と今日気づきました。子どもたちに恥ずかしくないよう闘っていこうと思います。

※

※

※

全同教大会が終わった日、妻がつぶやいた。

「私も中学時代にお父さんのような先生に出会っていたら、私の人生観は大きく変わったと思う。」

妻の思い、その思いに少しでも近づけるように頑張っていきたい。

決しておごるまい。決してうぬぼれることはない。自らの初心を心に刻み歩いていく。部落を語っただけで眼に涙があふれた日々……。決して忘れるな。決して天狗になるまい。そして、自分の原点を決して忘れまい。

父母の労働。祖父母の労働。その願いをわが原点として、ひたむきに一日一日を歩いていこう。生きるとはまさに学び成長することだと思う。決して愚痴を言うな。決して悪口を言うな。それそれぞれの思いに寄り添い、その底にある思いをしっかりと担げる人間になりたい。きれい事ではなく本音で生きていきたい。本物の自分をつくるために。決して思い上がるな。その思い上がりが墮落につながる。決して初心を忘れるな。あの震えた涙を忘れるな。

※

※

※

これは、大会の翌日に綴った文章である。恥ずかしくなるような文章であるが、私の本当の思いを正直に綴ったつもりである。反省の繰り返しであるが、特別報告での感動を胸に頑張っていきたいと思う。また、大会前日に全体学習の公開授業をした吉成先生の文章、また、成果集録に綴られた仁木先生の文章、多くの仲間の熱き思いに支えられていること。そのことを大きな支えとして前進していきたい。以下吉成先生、仁木先生の文章である。

※

※

※

第46回全国同和教育研究大会の開会行事として、これまで私を頑張らせ続けてきた、良き先輩であり、良き師である本校の森口教諭が特別報告を行った。この特別報告は、今まで全体学習に関わってきた者すべての思いをのせたものであり、それはそれは重く、しかし明日の未来を力強く見据えた報告となった。当日までにも、何度か目を通した原稿である。しかしその度ごとに、

熱い思いはたくさんの映像となって、原稿を透かして目の前を通り過ぎていった。当時の生徒の顔が浮かんで消え、また様々な場面が浮かんで消えていった。内容によれば、(森口教諭個人のことであり)見たことのない場面であるにも関わらず、たくましい想像力が幻影として浮かばせてきた。そしてその中の自分になったかのようにも感じられ、目が汗をかき、原稿がぼやけてくる。鼻水までもが流れ出してくる。自分がまだまだ弱いのか、それとも原稿が素晴らしすぎるのか……。どちらとも言えない。おそらく両方だと思う。そんな発表を、本当に、本当に心待ちにしていた。聞くだけとなる私までもが、何かしら重大な決意をするかのごとく、覚悟をして開会行事に臨んでいた。残念ながらアスティとくしまで応援することはできず、文理高校体育館で「峠を越えて」の展示係員として、また一聴衆として臨んだ。多くの挨拶等にも、今までにないくらいの集中力で耳を傾けていた。だんだん時間は迫ってきた。胸は待ちどおしいドキドキと、緊張したハラハラが交錯していた。いよいよ名前が呼ばれ、スクリーンいっぱいには馴染み深い姿が登場する。もうその時には、私の前にあったものはスクリーンではなく、実物像だった。一言も聞き漏らすまいという必死の思いが「峠を越えて」を展示している場から、会場内へと歩ませた。それこそ導かれるように足が勝手に動いた。発表がされていく。今まで以上に様々な思いが、溢れるように、津波のように押し寄せ、暗い会場をよいことに、私は涙をボロボロこぼしていた。その中で私は、宙を駆け巡る、振動を伴った森口教諭の声を聞いた。

「おいっ!しゃんと聞きよるかっ!」

本当に聞こえた。ふと我にかえて、それから冷静に周りを見回した。動くものは何もない。ただわずかに歩いている人のみ。しかしそれも、座っていられずに「峠を越えて」を買いに出てきた人であった。私は展示場へと戻った。その時(その間のいつのことかは忘れたが)妙に冷静になった私の中のもう一人の私の目に、スクリーンのすみでなされていた手話通訳が映った。趣味で手話をやっている関係上分かったのかもしれないが、明らかに手話通訳している人もが、変わったのを覚えている。感情が入り込んでいた。あんな手話通訳を見たのは初めてだった。やがて発表も終わりの時がやってきた。万雷のような拍手喝采。嬉しくて嬉しくて仕方がなかった。しかし冷静に考えると、本人を目の前にして拍手を浴びせるのなら分かるが、スクリーンに向かって拍手をしているのである。妙だ。だがそれほど会場の人々にしみ込むような特別報告だったのだと思う。そんな中で、私はまるで自分に拍手されているかのような思いすらしていた。顔をクチャクチャにしてしまうほど嬉しかった。しかしそんな感傷も束の間。やがて人の波が「峠を越えて」の展示場に押し寄せてくる……。

とにかくすごいラッシュだった。「群がって来る」と言ってよいほどの人ばかりだった。必死だった。しかし嬉しかった。特別報告を聞いている喜びとはまた別の喜びがわいてきた。みんなに、一声一声かけていきたいくらいだった。そんな中で、買っていた人々の中に二人、忘れられない人がいた。

「すみません、1冊ください。」

雑踏のざわめきの中で、かき消されてしまいそうな声だった。しかも正面から買いに来たのではなく横から、ほとんど裏から買いに来たと言ってもよいほどだった。忙しく、なかなか一人ひとりの顔まで見るができなかったが、ふと見たそのおばさんの顔は、横を向いていた。(あっ?もしかして視覚障害?)すぐに1冊の本とおつりを用意した。その時私は左手に本を持ち、そして右手は、おばさんの手を包んでいた。おつりも、しっかりと手のひらにおさめるように、包んでいた。

「ありがとうございます。」「いえ、ありがとうございます。」

心がほころんだ瞬間だった……。

そしてもう一人の買い手は、私の真正面から来た。

「5冊ください。」

〈えっ？……ありがたい！〉と自分の耳を疑うと同時に、すぐにそう思った。売れば嬉しいのであるが、たいていは1冊づつである。それを5冊というのだから、驚いた。忙しい中ずつとつむいていて、前なんか見る余裕はなかったのであるが、その時ばかりは、深々とおじぎをした。そして〈どんな方だろうか？〉と思い、興味半分に顔を上げた……。〈えっ？……〉そこにあったのは、母の顔であった。私の母の顔であった。一瞬私の中の時間が止まった。動揺もしていた。それでも平静を装い、

「どしたん？」

苦し紛れに出した言葉だった。

「講演聞きよってな、一緒に来とる人にも読んでもらおうと思うて……。」

嬉しかった……。ただただ、嬉しかった……。私は過去の学習指導案に、とにかく母の一言一言を捉えて汚く罵るような、家庭内の見苦しい実態をさらけ出したことがある。その母である。その場では、それ以外に特に会話することはなかった。事務的に5冊の本を用意し、代金を受け取った。ただそれだけである。けどその場の空気は、周りとは別ものだった。今思い出すと、その空気は、忙しく動いていく周りの雑踏の中でゆっくり動き、静かだった。そのことで、母が私の全てを理解してくれたとは思っていない。しかし、硬く凍てついた母の心を溶かすようになってきたのであれば、本当に嬉しい。「人は変わる」その言葉をあらためて実感した。そしてまた、新たな頑張るエネルギーを胸に蓄えることができた。今までの苦労が苦労でなく、喜びと変わり、そしてその全てが「礎」となっていく。そして、これからも私は堅い石のごとき「意志の杖」で、自分自身を支えながら頑張っていくことができる。私を支えてくれる全てに感謝して……。これからも私は、歩き続ける……。

※

※

※

第46回全国同和教育研究大会が徳島で開催されたことは私たちにとって大きな意味を持つものでした。森口健司教諭の開会行事における特別報告、大会前日の全体学習の全国への公開、富加見正夫教諭の分科会における報告とまさに全同教への参加が全校を挙げての取り組みとなっていました。昨年度の大坂大会を始めとして、これまでも多くの職員が全同教に参加してきましたがそれは個人としての参加であり、「行ったものだけがわかる」感動であり、そこから生まれる決意でした。どうしても全体のものにはなりにくい点があります。しかし今回はいわば「地の利」を活かした形で学校全体が参加するという形をとることができました。いままでこつこつと積み重ねてきた全体学習を中心とする部落問題学習を多くの人の前に公開し私たちの取り組みの方向や姿勢を問うことでもありました。

本校で全体学習が始まって5年。試行錯誤の日々の中から学年の全体学習が全校の全体学習へと広がりを見せ、多くの人々に公開もしてきました。昨年度大坂での全同教大会の前日に松原第三中学校での授業公開とその後の交流会の席で「来年は徳島で全同教があります。私たち板野中学校も大会前日に全体学習を公開したいと思います。ぜひ参加してください。」と宣言をし、この大会へ向けての歩みがスタートしました。といっても特別な準備をするのではなく日常の取り組みをより充実させそのままの姿を見てください、共に考えていきたい、また考えるための材料を

提示したいというものでした。さらに森口教諭の特別報告の内容の大きな柱の一つが全体学習である以上この授業実践を参観してもらう機会を設けることは避けることのできない課題でもあったのです。

森口健司教諭の特別報告は多くの人を感動の渦に巻き込みました。それは森口教諭個人の部落問題によせる燃えるような思いからのものでしたが、そのことがまたたまらなくうれしい私たちでした。「仲間」という言葉を実感したときでもありました。また、富加見教諭の報告とその後続く討議もすべての職員が自分の課題・問題としてとらえ、発言をしようとマイクの奪いあいのような状況になってしまったほどでした。

普段のままを見てもらう、日頃の取り組みをそのまま報告する、といっても現実には報告の文章をめくり夜遅くまで話し合いを続けることもありました。指導案をめぐる議論をたたくかわすことも一度や二度ではありませんでした。それらの取り組みの中からまた多くのものが見えてきたように思います。それは苦しみというよりはむしろ楽しみでした。すべての取り組みが私たちの自主的な姿勢の中から生まれたものであっただけにその思いはよけいに強いものでした。

私たちはこの大会へ向けての取り組みをすべてまとめてまた新たな実践をスタートさせたいと思いました。まとめることは単なる記録を残すことではなく、目に見える形で実践を積み重ね「歴史」を作り上げていくことです。そのことによって取り組みの成果も不十分な点もきちんと認識することができ、それを乗り越えようとする新しい意欲が湧いて来るものだろうと思うのです。部落差別解消に向けて闘うすべての人々の遠慮のないご意見をいただき大きな一歩踏み出すことができればこれにこしたことはありません。全同教大会を振り返りつつご一読いただきご指導ご教示いただければ幸いです。

※ ※ ※

大会が終わって多くの反響があった。その中で立場を同じくする人からの手紙は、私に勇気を与えてくれた。県外から参加していた年輩の方の手紙である。

※ ※ ※

前略、年の瀬もせまり何かとお忙しいことと思います。お元気ででしょうか。先日の全同教大会での先生の体験を交えながらのお話を聞くことができましたことが、私の今までの考え方、生き方に大きな心の変革を与えてくれました。先生のお話を聞かせてもらったことに、また森口先生に出会ったことに感謝しております。

私の地区からも何人か学校の先生が出ておりますが、自分の故郷が言えない話せないで暮らしております。私も徳島県での全同教大会に参加させていただき、各府県の部落の人たちのすばらしい発表を聞かせていただき、私の今日までの考えが生き方が変わり、自分の故郷が言えるようになりました。私は57歳になりますが、先日の〇〇町の同和教育研究大会で初めて多くの皆さんに自分の地区の暮らしや、先人の残してくれた祭りなど地区の歴史について発表することができました。このように多くの皆さんの前で自分の故郷が話せるようになり、心が解放され楽になりました。

徳島県での大会に参加させていただき、森口先生のお話を聞かせていただき、このような先生がいたのかと感動し涙が止まりませんでした。大会の帰りに会場の入口で森口先生に会えたことも大変うれしく思っています。声をおかけしたのですが覚えてくれているのでしょうか。本当にありがとうございました。もう一度お会いしてお話が聞けたらと思っております。

私の町は人口7900人余りの寒村であります。その中で部落の人口は、102名で戸数は3

5戸であります。その102名の中で学習会に参加しているのはまだまだ少なく毎月5名前後しか参加していません。

このように私の地区では先生方と一緒に学習するのに、地区であることのこだわりがあり参加できず苦しんでおります。まだ私たちの町内では差別用語がささやかれることが多く、地区外の人たちは地区の人たちの学習会に不満があるようなのです。その一つに同和対策事業に対する行政への不満があります。

「どうしてあそこだけようなるんぞ。対策事業するのはだれが決めるんぞ……」

そう言った地区外の人たちの思いに行政は説明ができていません。その説明の不十分さが地区外の人たちの対策事業に対する大きな不信となり、そんな雰囲気が地区の人たちの不満につながり、教育委員会の学習会の取り組みにも協力しない状況になって困っています。

このような町行政への不信不満が地区と地区外とを遠ざけ、建て前だけの会話となって盛り上がりがないさめた形での学習会にしていきました。このお互いの不信を取り除くことがこれからの大きな課題となっております。

私にとって森口先生と出会えたことが、このように自分を解放することができました。大きなよこびであります。ありがとうございました。できることならもう一度先生にお会いしたいと思います。

ありがとうございました。お元気でサヨナラ。(12月13日 午後7時20分)

※ ※ ※

さまざまな地域でさまざまな状況の中で解放を願って歩いている人たちの姿、人と人とのつながりの中で生かされていることを実感する。しかし、まだまだ厳しい現実がある。だからこそつながらなければならないと思う。

人と人とのつながり、本当にありがたいものである。多くの人の生命に生かされていることを実感する。最後にこの報告のまとめとして、特別報告のビデオのダビングを依頼された大阪府の小学校から送られた手紙と全同教参加の感想を掲載させていただく。研修や交流の場の広がり私たちに問われていると思う。

※ ※ ※

早速、全同教特別報告のビデオのダビングのお願いをお受けいただき、ありがとうございました。先日も電話でお話ししましたように、板野中学校の森口先生の報告を聞いた夜の交流会では、職員一人一人が、自分と部落問題、あるいは自分の親のことを語り合いました。

午後からPTAとして参加した保護者も、職員の話聞きながら、自分の家庭の問題を語っていきました。職員、保護者が共に生活を語り合う交流会になったのは初めてでした。

その交流会の場でも、また職場に帰って「峠を越えて」の本を紹介した後も、ぜひ森口先生の報告テープを聞きたいという声が出ました。そこでこんな無理なお願いをしました。

本校では、「共に生き、生活を高める子をめざして」というテーマで11月に公開授業をしています。それぞれの子がそれぞれの立場で生活を綴り、生活を語り、反差別の関係を創ろうとしています。ムラの子は、解放子ども会で、学校の部落問題学習を仲間とどう創っていくかを相談し、学校では、祖父母のムラを支えた「再生資源回収」の仕事を語ります。(もちろん、揺れながら……) 立場宣言する子もいます。その子につながり、自分のこと(家庭、身体、障害を持つ兄妹のこと……)を語る子もいます。

まだまだ不十分ですが、板野中学校に学び、また一つ一つ足元の取り組みを大事にしていきたく

いと思います。

また、本校では毎年全同教に参加した職員がレポートで報告しています。森口先生の報告にふれたレポートもありますので、同封させていただきます。

＜全同教大会徳島大会に参加して＞

11月26日、全体会の会場、アスティとくしまへ車で向かう。車があふれている道、案内図を手に行っている人、こんな渋滞をつくるくらい、多数の人の参加があるんだろう。

予想通り、会場は満席、通路に座り込む他はなかった。あいさつや基調提案の間は、何となくザワザワしていた会場が、特別報告「峠を越えて」が始まると、徐々に静かになっていき、会場全体が壇上に集中していくのが感じられた。

午後どこの分科会に行こうかと考えながら資料をめくっていた私も、いつしか画面に吸い寄せられていた。肩ひじ張って力んでいる様子もなく、淡々とした森口さんの語り口、それだけに心の中に直球のボールを投げ込まれるように言葉が届けられてきた。

《心に残ったことは……》

・全体学習、クラスの取り組みから、学年全体への取り組みに広がっていったこと。その中で、学年の教師集団のつながり、仲間意識がベースになって、学年全体の生徒一人一人を部落解放に向けて生きるかけがえのない仲間としてつなげていったこと。

・自分の生き方を語る、教師自らの姿勢

耳が聞こえない弟を人に知られるのが嫌だった。実の弟をそんな目で見ると自分が恥ずかしい、情けない。私はそんな自分を変えていくために、自分自身のために部落問題学習をしていくと語る教師。

・森口さんの生き方

故郷を離れることを第一に考えていた高校時代。出身であることを隠し、差別を目の当たりにしていても自分を殺して生きてきた大学時代。

「すばらしい人の中にも部落差別が入り込んでいることを思い知らされた」

森口さんを出身と知らず森口さんの目の前で差別発言をする人、その人を足ぎまに罵りもせず、すばらしい人、大好きな人と話す森口さん。

もうこの辺で私の目から流れる涙は止まらなくなっていた。

・キンカンとスタチの苗木を植えているお父さんの思い。

「初めて下宿へ来るんだからネクタイの一つでも締めてくれたら」としか見れない自分。本当はうれしいのに、「こんなお礼の仕方しか思い浮かばんのか、もっと気のきいた……」と考えたこと、妻に父の仕事を聞かれ、「一生懸命働つきよる」と答えたこと。それが今素直に「父ちゃんありがとう」と言えることが喜び。このことをまとめた冊子を父に見せたら、「お前のような先生がおったら、部落の子はうれしかろうな」と返す父。おぎつつよながら熱い心でつながっている父と息子。私も家に帰ったら実家の父に電話してちょっと優しい言葉の一つも言ってみようかなと思った。

・子どもたちの話、もう私は涙でメロメロ、まわりからもすすりあげる音しきり。

「学校」の映画を見た後、「僕の父さんもあんな感じだったのかなあ。宿題を教えてもらったとき、父さん苦しかっただろうな」と話した生徒。

理容店で働いているA子からの手紙、「『峠を越えて』を読んで、勇気と元気がわいてきました。板野中学校での輝ける日々、私は私に誇りと自信を持って頑張ります。」

「自分の思いを語っていくことによって自分が変わった。前に比べて明るくなったと思うし、物事をよく見るようになった。そして、朝がさわやかに感じられ、人の心の優しさというものが見えてきたと思う。今日帰るとき、コスモスの花が太陽に照らされていた。まるで僕に勇気をくれているような気がした」と語るN夫君。

中学3年という年齢の男の子が、これだけ素直に自分を見つめている。「授業の確かさ」ってこのことなんだなと思った。



全同教徳島大会特別報告
於 アスティとくしま



全同教徳島大会特別報告「峠を越えて」



全同教徳島大会前日全体学習（授業者 吉成教諭）